

2018/06/10

「人は知らない」

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」(ヨハネ 16:8)

イエス様は十字架の上で、「彼らは、自分で何をしているのかわかっていない」と言われました。今も私たちは多くのことを誤って理解しています。聖霊は、私たちが、罪、義、さばきについてどのように間違った理解をしているかを、教えてくださいます。

1. 人は罪を知らない

「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」(ヨハネ 16:9)

罪とは、イエス・キリストを信じないことだと、イエス様は言われました。そのほかの罪については、神は、まったく問いません。

罪には、神が問う罪と問わない罪があります。イエス・キリストを信じるかどうか、すなわち、聖霊を受け入れるかどうかは神に問われる罪で、私たちが通常罪だと思っている、倫理的な行いに反することや神の律法に反することについては、神はさばかないと言っておられます。

なぜなら、神の目には、人はすでに死んでいる状態だからです。本来、人は、永遠なる神とつながって、永遠のいのちを持っていました。ところが、罪によって神との結びつきを失い、そのいのちを失いました。その結果、私たちのいのちは有限になり、やがて滅んで土に帰るものとなりました。一体死んでいる人に、どんな罪を問うことができるでしょうか。死んでいる人に、罪を問うても結果は変わりません。これが、神の目にはすでに死んだ状態であるということです。

神が死人に対してできることはただ一つ、その人に再びいのちを与え、生き返らせることです。そのために、神は、私たちに御手を差し伸べておられます。もし、その手を拒めば、私たちの死は確定します。神の差し出す御手をつかむかつかまないかだけが、私たちが生きるか生きないかを決定するのです。

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」(ヘブル 4:15)

私たちが行いの上で悪いことをしてしまうのは、滅びる世界に生きている以上どうしようもないことです。死にゆく人が、見えるものにすがりつこうとするのは当然のことで、人が

罪を犯すのはすべての人が持っている構造的な問題です。それゆえ、イエス・キリストは、私たちの弱さに同情してくださいます。

本当の同情とは、その人に起こった出来事が、すべての人にも起こり得ると認めることです。災害に遭うのも、病になるのも、すべての人に起こり得ます。イエス様が私たちに同情するのは、それが誰の上にも起こり得ることだからです。イエス様は、ご自身が罪を犯すことはありませんでしたが、私たちと同じ肉体を体験し、私たちの弱さに同情してくださいます。

ところが私たちは、罪を犯す人を批判し、悪い奴だとさばきます。自分とは違うと言っているわけです。しかし、罪はすべての人が犯し得るものです。イエス様は、私たちに語りかける聖霊を拒否してイエス・キリストを信じないことは、罪として問いますが、死に閉じ込められているゆえの弱さである罪については、むしろ同情して、いやしたいと願っておられます。このことがわかると、私たちは互いの罪をさばき合うことをしなくなります。

2. 人は神のさばきを知らない

「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」(ヨハネ 16:11)

この世を支配する者とは悪魔であり、今の世界で具体的には死を指します。死は、悪魔によって、この世に持ち込まれたものです。

つまり、神のさばきとは、悪魔をさばくということです。神のさばきはこの一点に集中しているのです。それなのに、私たちは、さばきの対象は私たち人間だと思い込んでしまっています。しかし、神にとって、人の罪はさばくものではなく、同情するものです。

神は悪いことをしている人間をさばくののだという誤解から、テロ事件すら起こります。彼らは、神に代わってさばこうと考え、良いことをしていると思っているのです。神が人間をさばくと考えるのは、ひどい勘違いです。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。」(ヨハネ 12:47-48)

イエス様は、神は人をさばかないと、はっきり言っておられます。イエス様を受け入れなければ、その人は死んだままですから、さばきようがありません。神のさばきとは、悪魔に対するさばきのことです。その計画は創世記から始まっており、神様は、悪魔(蛇)をさばき、人を救うと語っておられます。私たちは、神のさばきを知らずに、自分がさばかれる対象だと思っていますが、それは誤りです。

「これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」（ヘブル 2:14-15）

3. 人は神の義を知らない

「また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」（ヨハネ 16:10）

義とは、神があなたを正しいものと認めることです。これが、救いを得るということです。イエス様は、私たちがイエス様を見なくなるのが私たちの義になると言われました。いったいどういうことなのでしょう。

「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところ遣わします。」（ヨハネ 16:7）

人は、良い行いをすることで自分は義となると思い込んでいます。そのため、いかに自分が良い行いができたか、神に認めてもらおうとしたりします。イエス様の弟子達もそうでした。

しかし、義とは、自分の行いで得るものではなく、神があなたを助けることです。その助けくださる神が、聖霊様です。ですから、イエス様は、聖霊様を助け主と呼びました。つまり、義とは、助け主を拒まないで受け取ればよいものなのです。罪は、構造的な問題であるがゆえに、神は私たちに同情して憐れみ、一方的に助けくださるのです。

それなのに、私たちは、自分ではどうにもならない罪の問題を自分で解決しようとしています。そして、むしろ、自分で努力して解決すべき問題を神頼みしたりしています。

神の義を受け取る方法は、自分がどうにもならない罪人だと気づくことです。善を行ないたいのにできないというありのままの自分を、正直に認めることができなければ、神の義を見つめることはできません。

罪を隠さず、ありのままの自分で生きていくことほど、楽で自由なことはありません。それなのに、多くの方は、罪を犯す自分はダメだと思って自分を拒否し、自分はもっと立派な人間なのだと思ってもらおうとして、本当の自分を拒んでしまいます。

これが、私たちの義に対する誤りです。そこで、イエス様は、義とは、私が天に上り、あなた方が聖霊を受け入れることだと言われたのです。神は、あなたを受け入れて下さっていますから、あなたは、神の義を、ただ受け取るだけで良いのです。

4. 人は自分が何を求めているかを知らない

私たちは、何か欲しいとか、何かうまいくようにとか、認められたいとか、日々いろいろな願いを持っています。しかし、あなたは、これまでにかなった願いによって、「自分は幸せになった」と言えるでしょうか。その時は、幸せな気分を味わっても、しばらくすると、飽きたり虚しくなったりして、不安を感じなかったでしょうか。

たとえば、結婚する時は幸せいっぱいだったカップルも、時間が経てば、意見の相違があったり、喧嘩をしたりして、離婚してしまうこともあります。結婚に限らず、こういったことは、すべてにおいて言えることで、人生はこれの繰り返しです。

これは、人は何を求めているか、全くわかっていないということの表れです。もし、本物を手にすれば、絶対にその幸せは色あせず、むなしくもならないし、飽きも来ません。では、私たちが欲しているのは、いったい何なのでしょう。

ソロモンは欲するものをすべて手に入れましたが、彼が最終的に出した結論は、「空の空。すべては虚しい。」ということでした。そして、彼は、「神を求めよ。これがすべてだ。」という言葉で、自身の伝道者の書を締めくくっています。

すべての人の魂が本当に欲しているもの、それは神です。人間のいのちは、神のいのちで造られているため、魂は神を知っており、潜在意識の根底に神を愛したいという思いがあるのです。

ある時、イエス様はサマリヤの町で出会った女性に、「水を飲ませてください」と頼みました。彼女が、なぜ自分にそんなことを頼むのか、不思議に思って尋ねると、イエス様は、次のように答えられました。

「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」(ヨハネ 4:10)

「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」(ヨハネ 4:14)

私たちは、のどが渴くと水を汲みに行くことを繰り返すように、魂が渴いては求めることを繰り返しています。イエス様は、「私が与える水がある。この水を飲めば渴くことがない。あなたが本当に求めているものはこれだ。」と言ったのです。神が与える水とは、聖霊であり、神との交わりです。

それを聞いた女性が、「先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」と願うと、イエス様は「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」とお答えになりました。なぜでしょうか。それは、彼女に自分の罪深さを気づかせるためです。

実は、神の水は、自分の罪に気づかないと飲むことができないのです。自分の罪深さを知

った時、初めてこの水が生きて入ります。なぜならその水は、それでも私はあなたを愛しているという水だからです。イエスの愛を知る水、これが渴くことがない生ける水となるのです。

この女性はこれまで5人の夫がいましたが、今は夫ではない人と暮らしていました。彼女は、こんな自分は人に受け入れられるはずがないと思っていました。その彼女に、イエス様は、「それでも、私はあなたを愛している。」と示すため、彼女の生活を明らかにしたのです。

私たちは皆、過去に様々な罪を犯してきました。私たちの魂の渇きは、罪が赦されるだろうか、愛されるだろうかという不安から来ているのです。ですから、罪を赦し、それでも神はあなたを愛しているという水こそ、魂の渇きをいやす水なのです。

神は、私たちの魂の不安が、罪責感から来たものであることを知っておられます。イエス様が与える水は、罪が赦されるという水です。私たちの魂は神の水を求めています。罪の赦しを求めているのです。イエス様の罪の赦し、それは、それでも神はあなたを愛しているという水です。

5. 人は神に愛されている自分を知らない

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

私たちは皆、神に愛されていることを知らず、愛されるとはどういうことかを知らずに、良い人が愛されると思い込んでいます。そのため、自分が罪人だということを認められません。イエス様が、サマリヤの女の罪を明らかにした理由は、「それでも私はあなたを愛している」というメッセージを伝えるためです。「こんな罪人であっても愛されている。」イエス様は、このことを伝えるために十字架に架かられました。これが神の愛です。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

(ローマ 7:24-25)

パウロは、みじめな自分に気づくことで、神の愛を知りました。ですから、パウロにとって、みじめな自分に気づくことは、素晴らしいことなのです。どうにもならない自分に気づくことで、神に愛されていることを知り、自分が求めているものは神の愛だということを知ることができるからです。

けれど、私たちはみじめな自分を拒否し、そのために不安で、神のさばきを恐れてきました。自分のみじめさを受け入れる時、私たちは同時に「それでも愛している」という神の愛

を受け取ることができます。この愛に気づくと、私たちの生き方は大きく変わります。人をさばかなくなり、愛するようになれます。

これを実際に体験してみましょう。愛されるはずがないと思い込んでいる自分を神の前にさらけ出すなら、それでも愛されていることを確認することができます。自分がひどい罪人であると知れば知るほど、ますます神の愛の大きさを体験するのです。神の前に自分の罪を言い表して、赦しを受け取る人は、まことの愛を知り、強くなることができます。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（I ヨハネ 1:9）